

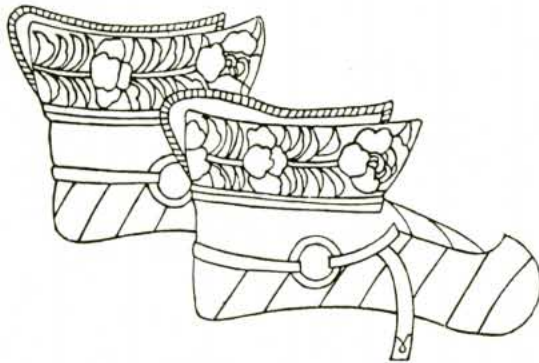
## 靴／かのくつ

(財)遺芳文化財団

日本はきもの博物館学芸課長 市田京子

和沓には、これまでに紹介した足袋沓や綱貫のように、農家や商家で用いられたものもあるが、古代から“貴族と武将”に用いられたものであり、その伝統は、主に、皇室行事に用いられるものに伝えられている。

現在、日本では総称的な呼称にもなっている「靴／くつ」は、中国の漢代後期に出現した語で、「シュエ」という皮の半長ぐつであったという。その影響を受けた和沓にも同様に「靴」とされたものがあつた。承平年間（931～938年）に成立した『倭名類聚抄』には「唐令云烏皮靴…和名化乃久都」とあり「かのくつ」と読まれたことが分かる。



『古事類苑』所載の靴

『古事類苑』に記載された靴の図には、「装束圖式」として「靴氈ハ錦赤地也、帯ハ革金物アリ、朝賀、小朝拝、節曾、内宴ニ、天子モ召ス、臣下ハ此外即位、行幸、…等ニ用ユ」とある。靴氈かせんというのは筒状の履き口に付けられたもので、元は行膝むかばさ（脚にかける覆い）を付けたといい、それが形式化したものであろう。大宝律令の衣服令では「武官五位以上が礼服の時に履く」ものであつたのが、後に文官も用いるようになって変化したようである。元の形は、正倉院御物にある烏皮靴くわかわのくつに伝わるという。

衣冠束帯に履くものとしての靴は、現在でも用いられているようである。時間の推移の中でどのような変化を生じているかは計れないが、はきもの博物館の収蔵資料には、昭和天皇の即位式である昭和3年11月の大嘗祭で用いられたものがある。

これは、京都御所紫宸殿で行われた即位式で

大礼使を務めた方が用いられたもので、宿舎を出る時から着用したという。

約8ミリ幅に波状の凹凸をもたせた表は、黒漆を塗った革で、今も艶やかさを保っている。甲は爪先に向かって緩く下がり、端部中央には幅・高さとも約3センチ、厚みが3ミリ程の突起が立ち上げてある。これは爪先尖りの形式化であろう。履き口には腰当てのような形で、波の向きを逆方向にして、同じ黒漆塗りの革が付く。その上端部は紫の革で6ミリ幅の縁取りがしてある。底革は2ミリの厚みで、やはり黒漆が塗られているが、使用により剥離している。接合は、雪駄でいう切り廻しにあたる、刃先で



昭和3年使用の靴

切り込みをいれて縫い糸を隠すように縫い合わせたものである。帯とされた幅1センチ程のベルトも黒漆ぬりて、両側面中央に外径3.6センチ、内径2.2センチの金輪、繋ぎや端留めの金具が付いている。

前述の靴氈かせんは、やはり赤地の錦織で、上段に蝶と牡丹、下段に葉か樹木をモチーフとした模様が織り込まれている。高さは8センチあり、そのうち2.6センチが靴本体の内側に重なっている。裏はやはり花柄を織り出した白絹が張られ、ちょうど紫革の縁取りの上端の位置で8カ所縫い止められている。この縫い糸は紅白の絹糸であるが、白い裏地の上には赤糸が出ない工夫がしてある。中敷きと履き口前部に付けた沓枕は、綿を白絹で包んで作られており、沓枕の厚みは3センチ程である。

長さ29.4cm×幅11.5cm×高さ18.0cm。